

会議名	平成 18 年度九州沖縄農研センターシンポジウム「農林水産バイオリサイクル研究プロジェクト—農水産エコチーム研究成果発表会—」
開催日時	開催日時；平成 18 年 11 月 28 日（火）9：30～15：30
開催場所	つくば国際会議場（エポカルつくば）（つくば市竹園 2 丁目 20 番 3 号）
主催者	農林水産技術会議事務局、九州沖縄農業研究センター
参加人数(概数)	約 174 名（主催者発表。技術会議、農研機構研究所・センタ、民間、団体、報道）
1. 会議の概要 (資料添付)	<p>農林水産バイオリサイクル研究プロジェクト—農水産エコチームでは、バイオマスを総合的に最大限利活用し、持続的に発展可能な社会を早期に実現するために策定された「バイオマス・ニッポン総合戦略」を踏まえ、平成 14 年度から食品廃棄物の原料化・循環利用技術の開発、作物資源由来の工業原材料生産技術の開発を図ってきた。さらに平成 16 年度からはこれらバイオマス変換・利用技術に加えてバイオマスの地域循環利用システム化技術の開発、多段階（カスケード）利用による地域モデルの開発に取り組んできた。これらの研究を通じて実用化、または実用化に近い廃棄物・未利用農水産物等のリサイクル・リユース、多段階利用技術が多数開発された。この成果発表会は、これらの成果を広く産官学の関係者と一般産業界へ紹介することを目的として開催された。畜産分野以外のバイオマス変換技術研究については情報を得る機会が少ないので、農業他分野におけるバイオマス変換研究の概要を知る機会であった。この発表会に出席して収集した畜産技術開発に関連する情報を報告する。</p> <p>研究成果発表</p> <p>（1）乾物・糖質生産力が優れる新資源作物“高バイオマス量サトウキビ”系統群の開発 （九州沖縄農業研究センター 松岡 誠）</p> <p>・畜産との連携による実証試験が課題。</p> <p>（2）パンくずから水素：製パン廃棄物等を原料とする水素発酵リアクター（島津製作所 平賀 哲男）</p> <p>（3）醤油麹菌のペクチン分解酵素群遺伝子の解析 （愛知県産業技術研究所 北本 則行）</p> <p>（4）コンビニエンスストア残さ主体の発酵リキッド飼料によるブタの肥育（畜産草地研究所 川島 知之）</p> <p>・質問事項；収集態勢について、コスト、問題点</p> <p>（5）豚糞と鶏糞を用いた栄養価の高い餌料用微細藻類の生産（水産総合研究センター 岡内 正典）</p> <p>（6）農産・食品廃棄物処理技術及び生分解性資材への変換技術（食品総合研究所 五十部 誠一郎）</p> <p>（7）米ぬかからのトコトリエノール高純度分取技術（東北農業研究センター 木村 俊之）</p> <p>（8）規格外小麦やビートパルプ等の利用技術と製品開発（北海道農業研究セ</p>

	<p>ンター 中司 啓二)</p> <p>(9) 真珠貝から化粧品を作る：アコヤガイセラミドの抽出 (水産総合研究センター 斉藤 洋明)</p> <p>(10) 芋焼酎蒸留廃液のゼロミッション型利用システム (九州沖縄農業研究センター 安達 克樹)</p> <p>(11) 環境に優しいサツマイモ塊根の総合利用システムの開発 (九州沖縄農業研究センター 吉元 誠)</p> <p>(12) サツマイモ茎葉の効率的回収装置の開発及び飼料利用 (九州沖縄農業研究センター 杉本 光穂)</p> <p>研究成果展示：</p> <ul style="list-style-type: none"> ・サブチーム、ユニットごとの研究成果についてブース毎に、パネル及び成果の実物を用いて紹介された。
2. 今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名	<ul style="list-style-type: none"> ・バイオマス飼料やそれを給与した畜産物の機能性を謳った課題が見受けられるが、「機能性」の概念は確立されたものではない。畜産物の機能性について「トクホ」の認定を受けようとするならばヒトによる試験が必要で、ハードルが高い。その前段階としても動物実験の必要性が高い。「バイオマス・飼料・畜産物・ヒト」を結ぶ系について、試験法の検討段階からの課題設定が必要。
3. その他の発表課題で関心のあったもの	<ul style="list-style-type: none"> ・成果発表 (5) ; 海産の微細藻類はエビや貝の餌となるだけでなく、仔稚魚の餌となる動物プランクトン生産のための重要な餌料である。この微細藻類の増殖に豚尿と鶏糞の培養液が有効とのこと。「水清ければ魚住まず」「昆布の不作は海水の栄養不足」などの言葉が思い出される。環境問題における畜産廃棄物の評価が少しは見直されてもよいのではないか。
4. 今後研究開発課題採択に当たって参考とすべき事項等	<ul style="list-style-type: none"> ・成果発表 (10) (11) (12) ; 九州ブロックの産官連携によるサツマイモ利用システムはゼロエミッションを目指す成果で、実用化が期待される。飼料供給、堆肥の利用などを目指す更に踏み込んだ耕畜連携システムへの発展が期待できる。
5. 会議の所感	<ul style="list-style-type: none"> ・現在、畜産分野で利用されている資源（農産副産物や食品廃棄物など）が経済性の検討も無しに活用システムが構成されてしまうと、お互いに不幸ではないかと感じる。研究開発の初期段階からの連携が不十分と思われる課題がある。（発表課題 (1)、(2)、(6) (7)、(8) など）
報告者	針生 程吉